

書 評 BOOK REVIEW

図説 日本の森林 森・人・生き物の多様なかかわり

日本森林学会 編, 202 頁, 定価 4,800 円
発行: 朝倉書店 ISBN 978-4-254-18065-7

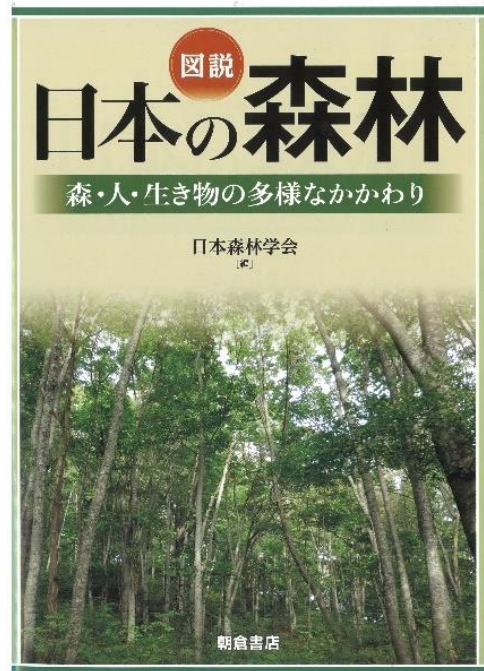
日本森林学会の編による「図説日本の森林 森・人・生き物の多様なかかわり」が 2024 年 10 月に出版された。

本書は、朝倉書店が刊行している、図説日本の樹木、図説日本の植生、図説日本の湿地等に並ぶものであり、総勢 122 名に及ぶ執筆陣が取り組んだ、日本の森林の多様な側面を読み解く図説となっている。内容は 3 部構成となっており、第 1 部は「森林を読み解く 136 景」、第 2 部は「生き物たちの森林」、第 3 部は「森林と人」である。刊行にあたっての前森林学会長の文中に、「人と森林のよりよい関係を追及する森林科学」という言葉が書かれているが、まさにこれを具現化する内容として、「森・人・生き物の多様なかかわり」が、豊富な写真や図によって示されている。

第 1 部の「森林を読み解く 136 景」では、北から南まで、日本を代表する森林 136 景の姿が、その森林を熟知した執筆陣によって描かれており、まさに日本を代表する森林のカタログとなっている。また、ここで取り上げられた森林は、屋久島等のように自然度の高い森林のみならず、人とのかかわりが強い森林も取り上げられており、日本の多様な森林の姿が示される。緑化工学会の会員にとっても馴染みが深いと思われる万博記念公園の森や、足尾荒廃地の森林再生、六甲山の再生林なども取り上げられている。多分、編者はこの 136 景を選ぶのに相当苦労したのではないだろうか？ 評者としても個人的に取り上げて欲しかった森林がいくつも頭をよぎる。編者もこのことは十分承知で、あとがきで、紙面の都合などで苦悩の選択であったことを述べている。読者それぞれが、思い入れのある森林の姿を頭に描きながら読むのも楽しみの一つである。

第 2 部の「生き物たちの森林」では、哺乳類、鳥類、菌類、昆虫等、多様な生き物の暮らしを通じた森林の解説となっている。日本の森林生態系を構成する生き物たちの姿が、最新の研究成果を踏まえて描かれており、研究の最前線に触れることができる部分である。

第 3 部は「森林と人」がテーマであり、森からの恵み（森から人へ）、森が育む文化、森を活かす仕組みと社会（人から森へ）といった内容のトピックが続く。この部分はまさに「人と森林のよりよい関係を追及する森林科学」の研究者ならではの多様な視点でできている。日本の国土の 67% が森林である日本に暮らす我々が、森林とどのようなかかわりを持って暮らしてきたのか？そして、森林との関りが過去に比べて薄れてきているといわれる現代の私たちが、今後どのよう



な森林との関係性を築いてゆくのか？を再認識し、考えさせられる重要な部分である。

個人的な感想になるが、この第 3 部を読み進んでいく中で、1 枚の写真に目が釘付けになった。それは「森に関わる人々の営み」というタイトルで書かれた赤池慎吾氏の文中に掲載された写真である。ここでは高知県魚梁瀬で杣として働いていた方の半生を通じて、鋸からチェーンソーへの変遷が描かれているが、そこに「樹齢 520 年のツガの伐採」という写真が載せられている。こんな大きなツガを有する森林が高知にあったのか……。思わずつぶやいてしまったが、ツガの巨木を巨大な鋸で伐採している場面が写真に残されている。この写真を見るだけでも、本書を手にする価値はあると感じた。

本書の第 1 部では、現代日本の代表的な森林が描かれているが、これ以外に、失われた巨木の森がかつての日本には存在したのであろう。その片鱗を示す写真や資料がまだ日本のどこかに残っているかも分からない。残された断片的資料を駆使して、失われた本来の日本の森の再構築が進むことを期待しつつ本書の紹介を終わりにする。

山中典和（鳥取大学 名誉教授）